「いとすぎ植樹祭」で偏見のない社会を目指す

寺尾 満寿男

現在の勤務校等
愛媛県今治市立吉海小学校

在外での勤務校／帰国年月
ボンベイ日本人学校（現ムンバイ日本人学校）／1987 年帰国
北京日本人学校／2018 年帰国

1980 年代にインド・ボンベイ日本人学校、定年退職後の 2010 年代に北京日本人学校に勤務した。インドからの帰国後にはじめた赤十字活動の精神と二度の海外経験で得たものを織り交ぜて、地元愛媛の子どもたちに伝えるために、「いとすぎ植樹祭」として、赤十字のシンボルツリーであるいとすぎの苗木植樹と講話の活動をしている。

実践・活動の内容

今治市には、多くの観光客やアジアからの技能実習生がいる。その人々に対して、子どもたちが偏見なく接することができるようになってほしいと願って、北京日本人学校からの帰任後、赤十字の理念に関連づけた「いとすぎ植樹祭」をはじめた。

インドからの帰国後から赤十字の活動に参加しており、このときは愛媛県青少年赤十字指導者協議会の常任理事、後に会長を務めた。北京からの帰国後は愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団の専門部長として、児童生徒に「人間皆同じ、仲良くしましょう」という気持ちを育みたいと考えて、青少年赤十字活動の一環として植樹祭と異文化に関する講話・出前授業を組み合わせた活動をしている。青少年赤十字（Junior Red Cross）が掲げる３つの目標は、健康・安全、奉仕、国際理解・親善であるが、２度の海外生活を経験した私は、特に国際理解・親善に力を入れている。

前年度のうちに学校長に開催を打診して許可をもらい、その後の実務は教頭や担当教諭と連絡を取り合って進める。実施に当たっては、児童会・生徒会の役員が主体的に動けるように、担当の先生に係分担などをしていただくように依頼している。

学校へは赤十字奉仕団の仲間など複数のメンバーで訪問。植樹では児童生徒への指導を担当してもらい、講演にも途中で参加してもらっている。

単なる講演と植樹セレモニーだけでは一方通行になるので、「木を植える」という行為を通して児童生徒と触れ合うことを重視している。講演にはクイズを取り入れ、一緒に歌を歌う、時折質問と対話をはさむなどして児童生徒の興味を喚起し、気持ちをのせるように努めている。

植樹したいとすぎの横には、「人道・博愛」の標柱を建てている。登下校の際などに横を通る児童生徒がそれを目にするたびに「おじさんが来て植えていた」「インドと中国の話を聞いた」「世界の人と仲良くしようと話していた」と思い出すことだろう。植樹祭は一日の行事だが、後から何度も思い出して長く子どもたちの心に残るということこそ意味があると考えている。

実施後に１行アンケートを書いてもらうが、ほぼ全員が「良かった」と書いてくれるなど、おおむね好評である。

植樹するいとすぎの苗木は自分で育てている。植樹できる大きさまで育てるのに数年かり大変だが、それも楽しみのひとつになっている。

毎年５～６校のペースで小・中学校を訪問している。いとすぎの植え時は 11 月から 12 月初めに限られるので、植樹祭もこの時期に集中することになる。

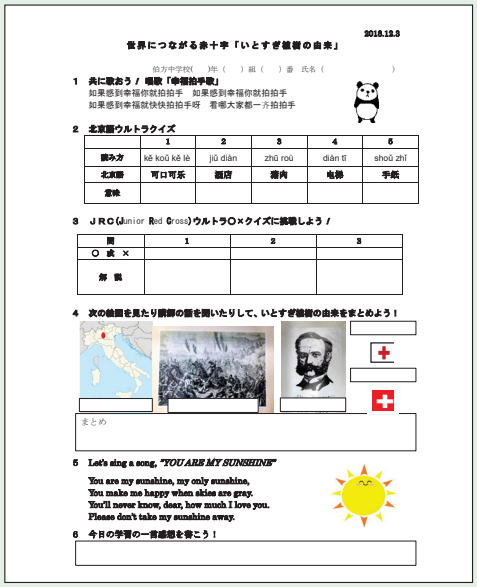
2020 年は新型コロナの影響で中止もあったが、晩秋の植樹の時期には感染拡大が下火になっており、いくつかの学校では開催することができた。ある学校では、コロナ禍で多くの学校行事がキャンセルされた後だったので「久しぶりに行事が開催できた」と、とても喜ばれた。2021 年は感染拡大も下火になり５校で実施、参加した児童生徒や教職員に感謝された。植樹の由来とともに、人道や異文化理解の大切さが伝わったと思われる。

2018.12.3

いとすぎ植樹祭実施報告

今治市立伯方中学校長　菅　達弘
生徒会(JRC)担当　長橋　生樹

１　目的　赤十字のシンボルツリー「いとすぎ」の由来を聞いたり、植樹したりすることにより、生徒に赤十字の理念である人道・博愛の精神を涵養する。
２　日時　平成３０年１２月３日（月）午前１１：３０～１２：２０（５０分）
※雨天決行（植樹は後日、生徒会の手で）
３　場所　今治市立伯方中学校　体育館（説明会）、植樹（校庭）
４　参加者　伯方中　全生徒および教職員
５　講師　愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団加盟促進部長　寺尾　満寿男　様
〃　〃　思想普及推進委員　小田　芳朗　様
６　会の流れおよび係（司会進行等…生徒会本部役員またはJRC委員など）
（１）開式あいさつ・・・生徒会役員
（２）講師紹介・・・生徒会役員
（３）いとすぎ植樹の由来など（２０～３０分程度）・・・寺尾満寿男　先生
※機器操作等の補助はJRC担当教員が行う
（４）いとすぎの苗贈呈式・・・講師→生徒会役員（２名、苗と標柱）
・・・・・移動（体育館から植樹場所へ）・・・・・・・
（５）いとすぎ植樹・・・・生徒全員、各学級代表者、JRC担当教員、講師
※写真撮影（JRC担当教員、講師）
※各学級代表者がスコップで土入れ
（６）閉式のあいさつ・・・生徒会役員
７　事前準備等
※（1）（2）は学校で準備する
（1）説明に関すること
・　プロジェクター
・　スクリーン
・　写真撮影（記録用）※植樹時に全体で１枚、他に１～２枚→賛助奉仕団事務局
・　会場設営
・　生徒代表２名（標柱といとすぎの贈呈を受けてもらう）
・　ワークシート（講師作成）※事前に印刷して当日の朝、生徒全員に配布
（2）植樹に関すること
・　穴の準備
・　植樹場所を決定する
※生徒の目に触れる場所、水はけのよい場所が望ましい
・　腐葉土　１袋
・　山土　一輪車　１～２
・　わら　２束（乾燥防止）
・　支柱
・　スコップ（生徒に土をかけさせる）
（3）講師に関すること
・　糸杉の苗・標柱（講師持参）
・　カメラ（講師持参）
・　パソコン・USBメモリー（講師持参）
・　ギター・譜面台（講師持参）
・　ワークシート（講師作成）



2018.12.3

世界につながる赤十字「いとすぎ植樹の由来」

伯方中学校(　)年（　）組（　）番　氏名（　　）

1　共に歌おう！ 唱歌「幸福拍手歌」
如果感到幸福你就拍拍手　如果感到幸福你就拍拍手
如果感到幸福就快快拍拍手呀　看哪大家都一齐拍拍手

2　北京語ウルトラクイズ

	1	2	3	4	5
読み方	kě koū kě lè	jiǔ diàn	zhū roù	diàn tī	shoū zhǐ
北京語	可口可乐	酒店	猪肉	电梯	手纸
意味					

3　ＪＲＣ(Junior Red Cross)ウルトラ○×クイズに挑戦しよう！

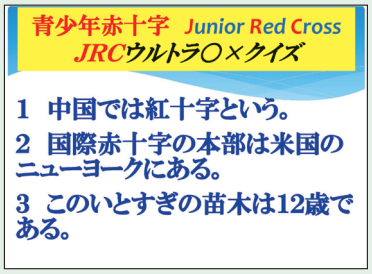
問	1	2	3
○ or ×			
解説			

4　次の絵画を見たり説明の話を聞いたりして、いとすぎ植樹の由来をまとめよう！

まとめ

5　Let's sing a song, "YOU ARE MY SUNSHINE"
You are my sunshine, my only sunshine,
You make me happy when skies are gray.
You'll never know, dear, how much I love you.
Please don't take my sunshine away.

6　今日の学習の一言感想を書こう！



いとすぎ植樹祭実施概要・ワークシート（上）、当日に使用するスライド（下）

評価と課題

今治市周辺の小中高等学校には赤十字加盟校が多いが、必ずしも活動に理解がある学校ばかりではない。県下には加盟校のないエリアもあり、その場合の知名度は低いので企画趣旨を伝えるのが難しいこともある。

また、学校現場が多忙で、「日程的にもう行事は入れられない」あるいは「これ以上行事を入れたくない」と断られることもある。

学校によっては、植樹する場所がないほど樹木が生い茂っていたり、育ちすぎた樹木に

困っているところもあり、それを理由に植樹祭だけでなく講演会も断られることがあった。これまでに植樹した樹はおおむねうまく育っているが、１校だけ、岩盤の上に建っている学校で後に苗木が枯れてしまったことがあった。

たった１回の「いとすぎ植樹祭」で、子どもたちに人道・博愛や国際理解の気持ちが育つわけではなく、また、外国人、特にアジアの人々に対する偏見がすぐに消えるわけではない。青少年赤十字が掲げる行動目標「気づき　考え　実行する」の「実行」までできるようになるためには、学校・家庭や地域での継続的な実践的指導や体験活動が必要であると考えている。私自身も、児童生徒の保護者や地域の人々に対しても人権教育を含めた国際理解について啓発活動を継続していきたいと思っている。

青少年赤十字および青少年赤十字奉仕団は、全国の小中高校や各県の奉仕団に繋がっている。そのネットワークを活用して「いとすぎ植樹祭」を県外にも広く伝えていきたい。

しかし現実問題として、受け入れる側の学校現場はとても忙しい。さらに新型コロナ対策に忙殺されるようになっている。ウイズコロナの時代に合致した新しいやり方を考えていく必要があると思っている。

愛媛県の小中学校には、派遣教員や JICA 海外協力隊などの海外赴任経験者が少ない。地区によっては青少年赤十字未加盟校も多く、管理職や教職員の国際理解教育に対する理解そのものがまだ十分とは言えない。児童生徒に国際理解教育を実施する前に、まず研修会などを通して、教職員を啓発する必要がある。特に、校長や教育委員会等に対する効果的な方法を考えていきたい。

「いとすぎ植樹祭」を引き続き実施していくためには、後継者となる人やスタッフの育成が急務である。個人的に退職校長に声をかけるなどして発掘してきた人材がいるので、積極的に育てていきたい。また、SNS などによる若い人たちへの啓発手段を模索中である。

このほかに、愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団では、道徳用教材を作成して学校に届ける活動をしている。これは歴史上の事件や偉人を題材にした読み物教材である。しかし、学校では道徳の教科化にともなって所定のカリキュラムを消化する必要もあり、教材を活用する余裕がないようだ。歓迎されていないと感じることすらあり、今後の課題である。

実践に至った経緯と提言

30 代のはじめにボンベイ（現ムンバイ）日本人学校に赴任した。海の近くで育ち、親戚がメキシコにいたことから、子どもの頃から海外への関心や意欲を持っていたが、実際に行く機会はなく、日本人学校赴任時が生まれて初めての海外旅行だった。

日本人学校は複式学級制で、教材・教具も不足していた。在任中に伝染病や大雨などの災害も経験した。その中で、「どんな劣悪な環境下でも、工夫すれば国内に負けないだけの教育活動ができる」という自信がついた。また、自分自身がＡ型肝炎に罹り入院して同僚や児童生徒に迷惑を掛けたことがあり、教員は健康維持が一番重要であると再認識した。

赴任前は、インドの人々や暮らしに偏見を持っていた。しかし、現地で暮らすうちに、現地の人々のふるまいには理由があることがわかってきて、偏見が徐々になくなっていった。たとえば食事を手で食べるなど最初は信じがたい行為だったが、人の体温にして食べるので口の中を火傷する心配もなくおいしくいただけるし、食後の手洗い用の水も用意されている。むしろ箸で食べるより安全で文化的であり、実は理にかなっていることなのだ

と知って納得した。

定年退職後に、もう一度在外校で教えたいと考え、北京日本人学校に教諭として赴任した。退職前は長く小学校と中学校で校長をつとめていたので、久しぶりに担任として小学生と接することができて新鮮だった。当時 64 歳だったが、体力的にもまだできると思った。

日本人学校の児童生徒は、特にアジアの人々への偏見が強いように感じた。私も中国に対して偏見を持っていなかったわけではない。対日デモの激しい時期に赴任したので不安もあった。しかし、日本人学校やマンションのスタッフや街の人たちには優しく接してもらい、随分お世話になった。また、公共交通機関のマナーについても悪い噂を聞いていたが、実際は北京のバスや地下鉄では必ず若者が寄ってきて席を譲ってくれた。さすが儒教の国だと思った。国同士の仲は良くなくても、庶民同士はそうではなく、どこかで繋がっていると感じた。

インド在住時代に、ボランティアとして現地の若者に英語を使って日本語を教えていた。その経験から国際共通語としての英語の重要性に気づき、帰国後、通信教育で英語の教員免許を取得した。それ以降は中学校の英語教師として、生徒に英語の楽しさ、特に「しゃべること」の重要性を教えてきた。

現在教育相談員として勤務している吉海小学校には、将来海外で働きたいという夢を持っている児童もいて、面談では自分の体験に基づくアドバイスや国際的な視野からの進路指導をすることができる。ＴＴとして定期的に授業に入っているので、社会科の「中国やインド」、道徳の「異文化理解」の単元などでは、出前授業の依頼を積極的に引き受けている。

また、県帰国教師の会会長（JICA 海外協力隊経験者も含む）として、会員のための研修会（現在赴任中の先生はオンラインで参加）、壮行会などを主宰。海外経験の共有の場を作っている。

地域の敬老会や婦人会の講演などでも、自分の体験を積極的に語ってきた。その結果、様々な分野に多くの知己を得ることができた。そこから声を掛けられることもあり、今後の生き方の選択肢が増えたような気がしている。これからも地域での発信を続けていくつもりである。

インドと中国の２度の海外赴任は、私にとっては人生観が変わるほどの経験だった。

世界中で日本の子どもたちがたくましく生きていることを知って感動した。

また、国の関係が悪くても国民同士はそんなことはなく、むしろ切っても切れない関係であることも実感した。外国人を偏見の目で見ることがなくなった。

さらに、どんなところでも生きていける、教員としてやっていける自信がついた。どんな児童生徒もかわいいと思えるようにもなった。

個人的には、家族の絆が強くなり、以前にも増して家族を大切に思うようにもなったと感じている。

在外校教員として経験し、学んだことはとても大きい。本人がその使命感を持って、目の前にいる児童生徒、保護者、同僚、そして地域に発信していくべきものだ。管理職は、帰国教師が喜んで発信したくなるような環境作りに努めていただきたい。管理職や行政の理解不足によって、帰国教員の持っている貴重な経験が埋没してしまうケースが多々見受けられるのは、とても残念なことである。

教職が私の天職で、教え子は宝である。これからも学校や児童生徒に関わり続けていきたいと考えている。